

## 国立公文書館の機能・施設の在り方に関する基本構想

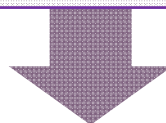
### (展示・学習機能)

- ①国際的水準を満たした展示施設の整備
- ②魅力ある展示手法の開拓
- ③学校教育との連携による学習活動の積極的展開
- ④専門性をもった職員の育成・確保及び外部との連携による担い手の充実

### (情報交流機能)

- ①広報活動の戦略的強化と体制整備
- ②国立公文書館を拠点とした交流の促進

※展示・学習等WGに特に関連する項目。



## WGにおける議論

### 関連する主な諸室

- ・展示室
- ・学習・研修施設
- ・エントランス等
- ・共通利用施設

レストラン、カフェ、ショップ等

※ これらの附帯施設等も含む。

- 新たな施設の整備を視野に入れた今後の活動の展開の在り方。  
(展示、学習、見学・体験活動等の具体的な展開イメージやターゲット層の考え方、効果的な広報戦略等)
- 新たな施設において関連諸室が備えるべき機能・設備。

などについて、国立公文書館からの現状と今後の取組、新たな施設における関連諸室に関する要望等の説明を踏まえ、議論。

### ○展示・学習機能関連

#### (展示のターゲット)

- ・立地からして、常設展示で修学旅行生など国会見学者を呼び込んで来館者を確保し、企画展示で別の層を狙っていくことも考えられる。
- ・外国人をターゲットとした多言語対応などの取組が必要。
- ・少子化等も考慮すると、展示のターゲットは修学旅行生に限らず、高齢者等も含めて広く考えるとよい。

#### (多様なターゲットに訴求するための工夫)

- ・ここに来れば日本国憲法の原本がなどの象徴的なものが見られるというシンボル展示は必要。
- ・所蔵する公文書全体のボリュームや時間軸などは、それ自体がサプライズであり物差しが分かりやすいので、多くの人々にとってのアクセスのきっかけになり得る。
- ・展示されている文書と来館者自身とのつながりを感じられるようにすることは大変重要。
- ・国立公文書館の業務に対する理解を促す展示や広い視野から公文書管理の意義を伝えるような展示を盛り込んでどうか。

#### (文書を分かりやすく伝えるための工夫)

- ・国立公文書館の所蔵資料は紙がメインなので、キーワードを軸にそれ以外のものを集めていくということもあり得るのではないか。
- ・文書に関わった人物の映像、動画、音声などを併せて展示すると、具体的なイメージが湧いてよいのではないか。
- ・子ども達に文書だけでその価値を分かってもらうのは難しいので、文脈を学べるような学習する場が必ず必要。

#### (原本展示の在り方)

- ・特に子ども達を意識した場合、必ずしも予算をかけてまで原本展示にこだわらず、原本とほぼ同じようなレプリカが見られるということでも、十分に納得が得られるのではないか。
- ・原本展示に力を入れれば、それだけ展示室のメンテナンスも含めコストがかかることになる。どこまで力を入れるかは、運用の持続性と原本展示の意義とのバランスではないか。
- ・展示の期間や方法等については様々な考えがあってよいが、原本展示の意義はしっかり確認しておく必要がある。
- ・やはり現物があるからこそ足を運ぶということがあるので、原本の展示には意味がある。
- ・原本を展示するとしても、そのスペースと子ども達の学習するスペースは分けて考えた方がよい。

### **(空間設計の考え方)**

- ・一般に建築物のタイムスパンが50年である一方、展示については見る側も使われるメディアもどんどん移り変わっていくので、展示のハードウェアを建築物として造り込むことは避け、将来的な可変性を備えた空間にする必要がある。
- ・憲法等の原本の展示などにはそれなりの設備・環境が必要になるので、その辺りは設計段階から考えておく必要がある。
- ・展示の来館者と研究目的などで訪れる人々の動線については、交わせる必要はなく、はっきり分けておいてよいと思う。

### **(学習プログラム)**

- ・小中高生だけではなくシニア層も取り込んだ、社会学習的な学習プログラムについても検討すべき。
- ・大学生や大学院生に専門教育前のプレ教育のような学習プログラムがあればよいのではないかと。

### **(活動の担い手)**

- ・展示や広報などの活動について、国立公文書館の人材だけで対応するのは難しいので、友の会会員など外からもアイデアをもらって運営していく枠組みをつくってはどうか。
- ・シニア層などを念頭に、展示解説等のボランティアの組織化といったことも考えられるのではないかと。

## **○情報交流機能関連**

### **(広報の内容やタイミング、ターゲット)**

- ・新たな国立公文書館は、「国のかたちや国家の記憶を伝え将来につなぐ『場』」としての国立公文書館の存在意義を伝える施設とすべき。
- ・メディアも年代別に対象を切っているので、暮らしてきた世相や時代に応じた世代ごとの切り口は有効。
- ・テレビのドキュメンタリー、ドラマ等と連動した広報・企画を行ってはどうか。
- ・新たな施設のオープン時にどれだけ盛り上がりを作れるかが重要。ニックネームやシンボルマークも検討してはどうか。
- ・公文書の役割への理解促進を図るためにも準備広報は重要で、開館前から積極的に広報や相互交流を行っていく必要がある。

### **(周囲とのネットワークを活かした広報戦略)**

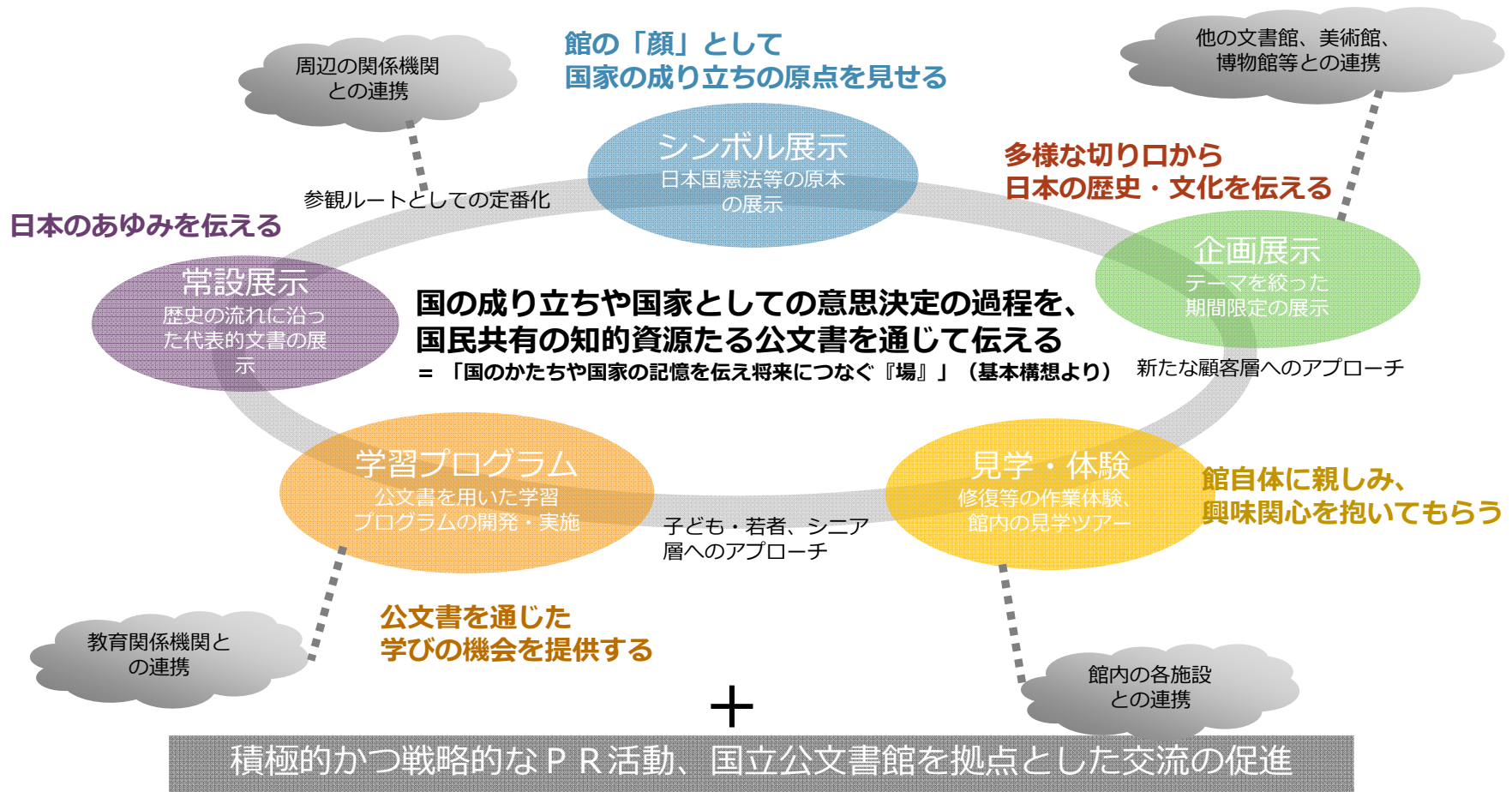
- ・既に友の会会員などのコアなファンがついているので、そういった人達にも関わっていただきながら新たな施設に向けたプランを立てていくといいのではないかと。
- ・グループで活動する歴史好きの層なども意識し、その活動を広げていけるようなサービスの提供なども検討してはどうか。

### **(集客のための空間づくりの工夫)**

- ・学校団体が昼食をとれるような広い空間や、おしゃれなレストランなどがあると集客につながるのではないかと。

(参考)

## 展示・学習、情報交流活動の展開イメージ



※ 事務局より案としてWGに提示したもの。

## 各活動の展開イメージ（仮案）

	シンボル展示	常設展示	企画展示
概要	日本の国家としてのあゆみを伝える (基本的に通年同じテーマによる展示)		多様な切り口から日本の歴史・文化を伝える (特定のテーマに沿って一定期間行う展示)
狙い・ ターゲット 層の考え方	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本のあゆみを学べる施設としての認知・定着 → 特定の層に絞らず広く万人に開かれた施設を目指す</li> <li>国会周辺参観ルートとしての定番化 → 国会参観者、修学旅行の学生等の取り込み</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>リピーターの獲得 → 「友の会」会員などのリピーターの増加</li> <li>多様な客層へのアプローチ → 新たな客層の取り込み</li> </ul>
所要時間	45分程度で一巡できる程度が望ましい		30分～1時間程度で一巡できる程度が望ましい (企画内容に応じて柔軟にスペースの使い方を変えられるような工夫が必要)
主な 展示資 料・企画 内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 国家の体制を象徴する資料</li> </ul> 例) <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本国憲法</li> </ul> 【国立公文書館の所蔵資料】	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 国の成り立ちや近代以降中心の我が国の政治、外交、社会等に関わる主要な事柄に関する資料</li> <li>● 国立公文書館・公文書管理について</li> <li>● 小中学生・生徒の教育に配慮した展示</li> </ul> 【国立公文書館の所蔵資料中心としつつ、他の機関からの借用資料も補足的に活用】	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 各テーマに関連する資料</li> </ul> 【国立公文書館の所蔵資料のほか、他の機関からの借用資料も積極的に活用】
展示手法	公文書等を中核に据え、映像やグラフィック等も交えた解説等によりその内容を分かりやすく伝える工夫を凝らす。さらに、他館からの借用資料も含めた映像資料、実物資料等の展示、バーチャルリアリティ（VR）等のデジタル技術なども活用した空間づくり等により、出来事や時代背景をよりリアルに分かりやすく伝える。		
運用面の 課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 展示テーマや内容の企画への外部人材の活用やそのための仕組みづくりについて検討する。</li> <li>・ 「国民共有の知的資源」たる公文書等を利用に供するという趣旨に鑑み、常設系の展示（シンボル展示、常設展示）については無料としつつ、企画展示その他の企画については、内容や性質によっては有料とすることも選択肢の1つとする。</li> </ul>		

	学習プログラム	見学・体験
概要	公文書を活用した学習プログラムの開発・実施	館内の見学ツアー、作業体験
狙い	次代を担う子ども達に、文書で記録を残すことの意義、文書を通じて歴史を学ぶ楽しさを伝える	公文書及び国立公文書館への理解・関心を高める
主なターゲット層	小学生、中学生、高校生 小中高の教職員（プログラムの開発への協力も含む） 大学生・大学院生 シニア層	小学生、中学生、高校生 来館者全般（参観ツアーのオプション）
具体的な内容（例）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公文書を活用した学習・研究の実践ワークショップ【小中高生】</li> <li>・公文書を活用した学習プログラム・教材の開発ワークショップ【教職員】</li> <li>・大学・大学院における専門職育成の実践演習的なワークショップ【大学生・大学院生】</li> <li>・展示内容、古文書の読み方等についてのワークショップ【シニア層、大学生・大学院生】 → 展示解説のボランティアとしての起用も想定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・修復室、書庫などのバックヤード見学</li> <li>・修復などの作業体験</li> </ul>

### 【積極的かつ戦略的なPR活動】

- ・国会周辺という立地の利点を活かしつつ、国立公文書館の存在意義を伝えていくための広報を行う。
- ・メディアと連携した世代ごとのアプローチ、情報伝達の流れを意識した多層的なアプローチ、SNSを活用した話題づくり等を戦略的に展開し、より幅広く多くの人々に国立公文書館に興味・関心を抱き、訪れてもらえるよう、働きかけを行う。

### 【国立公文書館を拠点とした交流の促進等】

- ・レストラン・カフェ、ミュージアムショップの整備などにより、多くの人々が気軽に訪れ、楽しむことができる施設としての魅力を高める。
- ・イベントの実施、学校団体の休憩・食事など多目的に活用できるスペースを整備し、国立公文書館を拠点とした交流の促進、施設利用の利便性の向上につなげる。
- ・展示内容の企画、展示解説等に大学生、研究者、シニア層等の外部の人材を活用し、国立公文書館の活動を支える人材の幅を広げることで、活動のさらなる充実・活性化を図る。